様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８５０２７

研究課題名（和文）人間学を軸にした教育における「境界」設定をめぐる研究

研究課題名（英文）A Anthropological Research on demarcation in education

研究代表者
田口　康大（TAGUCHI, Kodai）

東京大学・教育学研究科（研究院）・講師

研究者番号：７０７１０８０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年その理論的射程の広さから再評価されはじめているヘルムート・プレスナーの理論研究を中心に進めた。人間は身体の二重性ゆえに本性的に不安定な存在であり、そのために安定を図るための文化や技術の創造に方向付けられているということを理論的に描き出した。このような文化観に基づき、教育と存在の安定の関係について歴史的かつ理論的に分析した。社会における緊張や矛盾が、教育という媒介を通して身体において先鋭化され、存在の安定を失わせている状況が見られることから、教育を存在の安定のために資するものとして位置づけ直す必要を浮き彫りとした。

研究成果の概要（英文）：The main focus of this research was put on Helmuth Plessner, who has been reassessed in recent years thanks to his broad philosophical perspective. The theme drawn out here is of the fact that human beings are directed toward cultural and technological creation in order to stabilize their natural instability that comes from physical duality. Based on such cultural view, the relationship between the education and the balance of existence has been analyzed both historically and logically by tracing the actual conditions. Social tension and contradiction of individuals have been increased through our education, and the balance of existence has been lost. This revealed the fact that our education needs to be relocated to the other place in order to stabilize the existence.

研究分野：教育学

キーワード：哲学的人間学　プレスナー　脱中心的位置性　自然的技巧性　環境世界　社交論　笑われること　道化

１．研究開始当初の背景

本研究は、「境界」という概念から教育という営みを分析することに主眼がある。ここでの境界という概念は、領域の境という意味とともに、限界という意味合いを含んでいる。

（１）教育における境界をめぐる国内の研究

①教育理念や教育制度的な観点における境界すなわち限界を問う研究

②教育コードの伝達不可能性・不完全性というコミュニケーション上の限界から境界設定を試みる研究

③教育システムの権力性・暴力性から境界の設定を試みる研究

④信仰やセクシュアリティ等個人の不可侵性から境界の設定を試みる研究

上記のように、広義の教育理念や制度・システム的な観点からの境界設定か、もしくは信仰やセクシャリティ、道徳などの個人の不可侵性に根差すような境界設定を試みる作業が中心であった。

（２）国外の動向（ドイツの教育学界）

①政治的・社会的にいかなる境界設定が教育には必要かという議論

②子どもにとっていかなる境界（限界）を、どのように、なぜ設けることが必要なのかといった人間形成的な観点からの議論

③PISA 調査を背景に学習への過剰なエンパワーメントに対する境界設定の必要を問う議論

④教育現場における児童虐待や性暴力事件の数々が歴史的に長年にわたって生じていたという事実が明らかになったことに由来する、個人の価値観やセクシャリティが有する境界性という観点から教育全般の問い直し

上記が主要テーマとなってきている。

（３）本研究の位置づけ

日独の研究動向を概観してみるに、教育の理念及び制度的な観点か個人的な観点かのいずれかの観点から境界設定を試みようとしてきた状況が確認されるが、教育（特に学校教育）という営みは、理念的制度的には公共的なものであるものの、私的な面を持つ人間の形成を担うという点からするなら、それは公的かつ私的な双方の領域に跨っており、いずれかの領域のみに基づいて設定しようとする試みでは不十分であり、教育を公私が連関したものとして捉えたうえで境界を設定することが必要である。しかし、私的領域と公的領域の境界が不透明なものとなり曖昧なものとなった今日においては、公私の領域に基づいた境界設定を行おうとしても、その前提自体が不透明なために不可能である。このような状況下で、再度、教育における境界設定をするために、以下の二つの観点が必要である。第一に、人間を私的領域と公的領域との連関のなかで個人としての自己を捉える存在であると理解する人間学、とりわけ哲学的人間学の研究をもとに、「身体」を起点に、人間存在における境界の必要性の問い直しである。それを踏まえて第二に、学校教育機能そのものを、公と私あるいは個人と社会の境界を設定する機能を有するものとして理論づけるとともに、そのこと自体が教育における境界を設定するためにも必要であるということを提示することである。

上記の研究を通して、教育における境界の設定の必要性を確認し、その議論のための理論枠組みを設定することが課題となっている。

２．研究の目的

本研究「人間学を軸にした教育における「境界」設定をめぐる研究」は、私的領域と公的領域の境界とともに個人と社会との境界も不透明になり、公私や自他の区別を有した自己形成が難しくなった「境界喪失」の時代において、人間形成を担う「教育」にとって、公私および個人と社会の境界をいかに捉えるのが望ましいあり方なのかということを人間学的な観点から究明し、「境界」設定機能を有するものとしての教育理論を構築することを目的とする。その際、私的/公的領域ないしは個人/社会というマクロな視点だけでなく、人間の「身体（Körper/Leib）」ないしは「自然性（Natur)」というミクロな視点とを相互に突き合せる人間学的な手法を用いながら、教育における「境界」設定が、人権的な観点からも求められていることを明らかにすることを目指す。

３．研究の方法

【概要】

本研究では、Plessner の哲学的人間学をもとにした人間存在における境界設定をめぐる基礎理論研究（1）(2）と、その理論研究を教育に接合させる形での応用理論研究（3）とを段階的に行うことを通して、教育において望ましい境界設定を究明するとともに、境界設定機能を担うものとしての教育を基礎づけるための理論（4）構築を行うという方法を設定した。

⑴Plessner における哲学的人間学理論研究

⑵　哲学的人間学理論をもとにした人間存在における境界設定の必要性に関する研究

⑶　人間学的観点から照射する教育における境界設定に関する研究

⑷　境界設定機能を担うものとしての教育理論の構築

いずれの研究段階も主として資料収集と読解による研究手法を取り、資料収集と読解を重ねていくことで研究を深め、幅広い知見を踏まえ強固な基盤を有した理論構築を目指した。

【詳細】

(1) Plessner における哲学的人間学理論研究

日本においてはいまだ理論の概要の紹介に留まっている Plessner の哲学的人間学理論であるが、その読解には前提知識を多く必要とする。彼が参照している自然科学的な研究についての著作は、すでに読解のうえで前提知識を積んでいる。本研究段階においては、研究目的に合致する Plessner の哲学的人間学理論に関する著作を一次文献として設定し、精読することを基本的な研究方法とし、彼の哲学的人間学理論を展開することを目的とした。一次文献としては、社会と個人との境界をめぐる分析である“Grenzen der Gemeinschaft.”(1924)と、彼の主著の一つである“Die Stufen des Organischen und der Mensch.” (1928)、権力と人間の自然性との関係性についての分析を主題にした“Macht und menschliche Natur.” (1931)の三冊をメインテクストとして設定した。また、Plessner の基礎理論の理解のために、代表的な Plessner 研究者の著作を二次的資料とし、読解を同時並行で進めた。

(2) 哲学的人間学理論をもとにした人間存在における境界設定の必要性に関する研究

Plessner による基礎理論をもとにした境界（Grenzen）概念をめぐる研究は、近年ドイツにおいて蓄積され始めている。管見の限り、それらの研究は、身体イメージに基づく境界に着目するものか〔、個人と社会との境界に着目するもののいずれかに分類される。Grenzen 概念をめぐる研究をさらに収集し読解のうえに整理しまとめることを研究方法とし、本研究目的の達成のために活用できる形に理論を再構成することを本研究段階の目的とした。

(3) 人間学的観点から照射する教育における境界設定に関する研究

本段階においては、上記(1)(2)の基礎理論研究を基に、それらを教育に接合することが研究の課題である。教育と境界をめぐっての議論は、国内外の研究動向にも記したように先行研究が存する。本研究は人間学的な観点から教育における境界を設定することを目的とするが、その目的を達成するうえでも、それらの先行研究は無視しえず、それら先行研究を人間学的な見地からの統合を試みつつ、自然科学および人文社会科学を含む人間学的な観点から総合的に、「教育」において望ましい境界のあり方について分析研究を行う。

(4) 境界設定機能を担うものとしての教育理論の構築

上記、(1)(2)(3)の研究を踏まえたうえで、境界設定を担う機能として教育を位置づけるための理論を構築する。公私および個人と社会の境界を設定する機能を持つ者が存在しない状況下で、公的機能を有しつつ、私的な人間を対象にするものとして公私に跨るシステムを有する唯一の存在である教育こそが、社会と個人の公私の関係との境界とを設定する機能を有するべきであり、それは人間の自由や平等といった観点からも必要とされるということを、これまでの人間学的観点からの境界をめぐる研究の整理・再構成を踏まえた理論を設定することが課題となる。

４．研究成果

初年度の研究成果としては、プレスナーの「脱中心的位置性（exzentrische Positionalität）」という概念を中心とした人間学理論が、現代社会を深く理解するための理論的基盤を提供しうるということを明らかにしたことにその第一義がある。

【文化へ誘因されている人間】

プレスナーによるならば、身体と精神との二重性およびその二重性を認識する第三の視点という三つのあり方から成る人間は、それゆえに、その三つのあり方を一人の個人として調和させ、統一することに本性的に方向付けられている。この調和、統一を図るために、人間存在は、様々な技術や文化を創造するというのが、プレスナーの理解である。換言すれば、人間は存在としてそもそも不安定であるために、安定化へと強いられているということである。その過程で創造されたのが、たとえば、言語や身振りなどのメディアや文学や芸術、礼儀作法、科学技術などである。これら文化や技術は、根源的に、不安定化する心身の境界の絶えざる措定を機能として持っていると見なすことができる。

だが、存在の完全なる安定は成し遂げられない。なぜなら、この不安定性つまり存在の三つのあり方にこそ、人間の条件があるからである。仮にこの三つの重なり合いながらも屈折しているあり方が統一されるということは、三つに分離されているからこそ生じている人間存在に独特な「意識」が消えうせ、機械や単なる「モノ」になる。存在の完全なる安定、それはすなわち、人間の存在条件の消失および人間でなくなることを意味している。

【歴史上における安定化の試行錯誤】

この完全な安定を求める人間の欲望は、歴史上においてはラディカリズムや狂信主義、もしくは個人主義的ナルシズムを招いてきた。

プレスナーは、フェルディナント・テンニースの「ゲゼルシャフトとゲマインシャフト」に対しての批判と重ね合わせる形で当時の社会主義者や各運動の「急進主義者」たちの「コミュニティ思想」を批判している。当時の（ワイマール時代の社会状況を鑑みて）「ラディカリズム」という現象的な状況、マルク

スの資本主義的社会がすべての社会性を破壊し、共産主義における人間的・人道的なエトスへの問いかけが、革命的・救世的（メシア的）な形態をとっていくことを批判するのである。

もう一方で、ニーチェ的な、個人主義的・貴族道徳（エトス）を、コミュニティ的なものと社会的なものを、一緒くたにしたものとして、どの関係性も対等であるとするような社会的な、コミュニティ的な発想は、奴隷精神をもたらし、存在としてさらなる不安定化をもたらすとしてそれも批判する。

つまり、両者とも、社会主義にせよニーチェ的貴族道徳にせよ、ワイマール時代に現れてきた新たな可能性である社会的エトスというものをまるで見ていないということであり、プレスナーはその狭間に可能性を指摘する。

プレスナーは、市民社会でのリベラリズムと社会のあり方を積極的に肯定していき、そこからの批判を展開する。プレスナーが急進主義といって批判するものは、それが「本来性」や「真実性」といった「存在の根源」といったものによった形而上学的な思想であり、見かけ上の一元的な発想である。その意味で急進主義とは、今あるもの（das Bestehende）に対して「自然な理想（一元的理想）」を対置させ対抗するものをさすのである。 「今あるもの」もしくは「存続するもの」とは、いまここにある現実のことであり、事実やそこで生きている現実、存在といったものである。それらに対して急進主義は「精神的な理想」を、つまり、当為（Sollen）を対置させる。そしてこの現実を拒否する姿勢と精神的・理想的な姿勢は、急進主義の核であり、しかし実際には、その対立において根本的に二元論をなす。この急進主義は様々な形態をとる。自然科学のモデルのように機械的な構造物として世界を見るもの。そうした場合には、それは、いたるところにある合理性に基づいた方法論的なやり方を要求する「合理主義（Rationalismus）」になり、自然性や衝動性といったものを強調するならば、「反知性主義（Irrationalismus）となる。しかし、両者ともが同様に二元論に基づいており、「精神的なものと現実的なもの」の対立・相克として世界をみているのである。そうしたものの思想的源泉は、キリスト教的な肉と霊、神の世界を追放された人間と神の関係に基づくような思想なのである。

【存在の不安定を社会で支える】

すなわち、様々な安定化のための試みは、この二重性の超克を目指している限りは、いずれ失敗を導く。重要となるのは、失敗に運命付けられている安定化の試みを、社会によって支えていくということである。ここから、プレスナーの人間学理論は社会理論へと射程を広げていく。

最終年度は、初年度の研究成果を踏まえ、教育における境界設定機能の重要性についての理論枠組みを設定したことが成果としてあげられる。まずは、心身の二重性およびそれを認識するという人間の三つのあり方を確認し、それらは統一体としてありつつも、互いが互いを媒介し屈折しているために、不安定な状態を構成しており、その状態を止揚するために、境界設定を試みる文化や技術が必要となることを理論的に明らかにした。また、初年度は社会上の境界設定の必要に焦点を当てたが、今年度は個人の存在にとっての境界設定の必要に焦点を当てた。現代、存在の三つのあり方の安定・調和がうまく行われず、様々な形で不安定さの露呈がなされていることを確認し、その状況を改善するためにも教育の役割に意義があることを指摘した。これらの研究成果は、現代の様々な問題状況と教育との関係を詳らかとし、教育の責任を問うとともに、教育の再構成のために必要な観点を示唆するものであると評価される。

【身体と環境世界】

環境世界から身体が「他」なるものを媒介することで、私と他なるものとの間に境界が生じる。しかし、それらは「身体」において生じるものであるため、私はその身体のうちなる「他」との間で調停し、統一を果たさなければならない。その他なるものを私のものとして身体化する、もしくは外なるものを私に合わせることによって。分裂と調停、統一の過程―この過程は「異化（Dissimilation）」と「同化（Assimilation）」の過程とも言い換えられる ―を通して、私は曖昧になった「私」の境界を設定し、「私」の安定化をはかる。この分裂と統合の弁証法的な過程で人間が作り出してきたのが、習慣や習俗、言語、宗教、芸術、文化であり、歴史であった。

プレスナーの人間学理論に基づくなら、「教育」もまた同様に人間が創造したひとつの文化であり、人間が安定化をはかる過程の産物であるとみなすことができる。モレンハウアーは、教育の一般理論の基本テーゼを、大人の立場である者が自身の生活形式―特定の歴史的な生活形式ではあるものの―を子どもに提示することにあるとしている〔モレンハウアー 1987, 34-35〕。世界の中で存在の安定を獲得するために必要とされるものが生活形式として蓄積され、それらが次世代へと引き継がれていくところに「教育」の基礎的な第一歩がある。存在の矛盾を止揚しようとし、技巧性を発揮して創造してきたものを繋げていく過程に生じたのが教育だといえる。

だが、人間存在の安定化に資するものとしての「教育」は二つの方向性で理解されうる。子どもの存在の安定化であるとともに、大人自身の存在の安定化である。つまり、大人自身にとって見知らぬ異邦人である子ども―他なる存在を、自分（たち）自身に同化する

という営みとしてである。子ども（たち）にとってみれば、結果的に自身の存在の安定化がもたらされるとしても、その生活形式の提示は他なるものを一方的に与えられることをも意味しかねない。この時、大人と子どもとの間で、身体を媒介とした「境界」設定をめぐる緊張関係が生じる。大人たちから子どもたちへ外部からの存在の境界設定がなされるのに対し、他なるものを与えられた子どもたちがそれを難なく身体化するなら、大人たちから与えられた境界を自身のものとすることで、存在の安定をはかることが可能となる。だが、モレンハウアーが述べるように、この「提示は、原理的には各個人によって異なる結果を生む可能性がある」。被教育者である子どもたちが、教育者である大人たちに提示されたものに対し拒否反応を示す可能性は、今日の社会における教育状況を考慮するまでもなく想像される。外的に措定された存在の境界に違和を感じ、それを身体化することができない子どもたち。教育という行為、大人たちの存在の安定化のための境界設定という行為には、その対象とされる子どもたちからの何らかの形での「抵抗」の可能性がある 。まして、提示される生活形式はある特殊な時代に構築されたものであるために、時代や状況が変わればその生活形式が存在の安定化をもたらさない可能性もある。とは言え、子どもたちには、環境世界ないしは社会と自己とを調停するための、存在の適切な境界が与えられることは必要である。身体を媒介として現象してくる他なるものに、適切に対処し、他なるものとの間での調停は可能とされなければならない。

このような観点から教育を読み解く際に重要となるのは、存在の不安定さと、境界の曖昧さを生み出す構造的な要因としての Körper と Leib との二重性である。プレスナーの人間学における身体概念は社会との相互関係から成り立っているものであるために、社会存在論（Sozialontologie）的なものと言い得るが、そうであるゆえに、その身体は非常にヴァルネラブルで危険に曝された状態にある。私のものでありながら、私の意のままにならない側面を持つ身体は、他者や社会、政治、経済、環境的な条件に左右される状況に常にあるからだ。そのような状況にある身体の二重性を止揚することに、教育が資するのだとするなら、まずは身体が周囲環境からどのような影響を受けているかについての把握が必要となる。どのような影響を受け、環境と自分自身とをどのように調停しているのか。調停ができていないとしたら、何との間でできていなのか。つまり、その人自身の存在の「境界」を可視化することが求められる。プレスナーの人間学に基づくならば、教育という営みは、被教育者の身体の二重性に働きかけ、身体存在 Leibsein と肉体の所有 Körperhaben との弁証法的過程を促すものであり、それはすなわち終わることなき存在の安定化に資することを目指した、境界設定を巡る営みであると言える。

【存在の安定のための教育】

プレスナーの人間学から教育という営みを照射すると、全ての教育的働きかけは「身体」を媒介としているということ、身体の二重性に働きかけた行為であるということが理解される。人間存在に構造的につきまとう身体の二重性という矛盾を止揚する過程の中で創造されてきたのが「教育」であるなら、教育という行為には、被教育者とともに教育者自身の存在の安定も関わっている、という視点は無視できない。自分たち自身の存在の安定をはかるための教育という視点である。するとこの時、教育という営みは、先に生まれた大人たちと、後から生まれた子どもたちとの調停の過程とも捉えることができよう。だが、すでに存在の境界の絶えざる安定化を図ってきた大人たちに比べ、子どもたちは非常にプレカリアスな状態にある。教育の歴史が身体の規律化と密接な関わりがあり、身体への働きかけの歴史であると示されているように、「教育」という名の下に、存在の境界への過剰な侵入がなされてきていることは、歴史上ばかりか今日においても否定できない 。教育行為が身体を媒介としてなされる以上、教育は身体の二重性に注意を払わなければならない。教育行為から生じる悲劇を繰り返さないために、新たな視点から「教育」の「境界」が問われなければならない。存在の境界は慎重にかつ具体的に問われ、共有されねばならない。境界は共有されて初めて成立するものである。この時に忘れてはならないのは、個々人によって周囲環境から影響を受けるものが異なる故に、存在の境界は一義的ではあり得ないということ。加えて、社会や環境の変化とともに、それに対応する形で、人間存在のあり方すなわち人間存在の「境界」も流動するということである。つまり、教育の境界を設定するためには、人間存在の境界についての絶えざる認識の更新が必要となろう。人間存在が身体の二重性の弁証法的過程のうちにあるのと同様に、この人間存在に関わる教育もまた、先に生まれた人間たちが創造した文化や歴史と後から来る人間との、大人と子どもとの弁証法的過程の中にあり、その存在ないしは営みの境界を求められるものなのである。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計　4　件）

田口康大「学校教育の境界を考える―教育的行為における身体の位置性」教員研修会特別講演、2014 年 12 月

田口康大「日本の海洋教育の方向性―自然と身体の関わりから」日本海洋学会（招待講演）、2014 年 9 月

田口康大「Helmuth Plessner の Grenze 概念について」教育哲学会、神戸親和女子大学、2013 年 10 月 13 日
田口康大「「境界にいる人間」から考える「教育の境界」」宮城教育大学 ESD セミナー—持続発展教育と環境教育—、宮城教育大学、2014 年 3 月 14 日（招待講演）

６．研究組織

(1)研究代表者

田口　康大（TAGUCHI, Kodai）
東京大学・大学院教育学研究科･特任講師
研究者番号：70710804